とある侍の最強物語

クラリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある侍の最強物語

【Ｎコード】
Ｎ４１８６Ｚ

【作者名】
クラリス

【あらすじ】
スペディオだったものです！携帯がぶっ壊れてしまい、新規登録しざる負えなくなってしまいました。
すいません！せっかくお気に入りしてくださった方々がいたのに・・・申し訳ないです。
一応「とある侍の一方通行」を改良したものです。

書き直したので全然違うものになってますが、ぼちぼちと進めていくので、どうかよろしくお願いいたします。

1、与えられた世界（前書き）

設定違ってます。

1、与えられた世界

（痛ェ・・・・あれ？どうしてこうなったんだっけ？）

意識が朦朧の中、男は考えていると、近くで見知った顔が複数近づいて叫んでいる。

（あぁ・・・そうか。俺はこいつらを守るためにやられたのか）

自身で納得して体を見る。心臓付近に深く刺さった刀がそこにはあった。

もう直々持たなくなるだろうと察するが、どうにも駆け寄ってきた仲間達に送る言葉が出ない。

（ははっ・・・これでいい。俺がどうなろうと、こいつらが生きてればそれだけで十分だ）

なんて自分勝手だろうと思うと自然に笑えてきた。

（ごめんな。もう一緒にいてやれなくて・・・）

そして、限界はコクコクと近付いていき、目を閉じていくその度に周りがもっと騒がしくなる。

男はそれを感じながらも思いぴたり、そして

（お前らと出会って俺は）

（幸せだったよ）

優しく笑って意識を手放した。

「・・・・・・」

研究所で設けられた部屋に一人の少年がソファーから起き上がる。

「随分とまァ懐かしい夢見たな」

頭をガシガシを掻いてゆっくりと立ち上がる。

その髪の色は白で、目の瞳はルビーのように赤い。

はぁ、とため息を吐いて自室にある冷蔵庫の方へと向かう。

何か食べ物がないかと開けてみると

「コーヒーしか入ってねェ・・・・・・・・・・・・」

ズラリと並べられた缶コーヒーしかなかった。

「ここまでカフェイン中毒になるたァ思ってなかったね」

自分自身が呆れるほどの中毒患者なのだ。しかもブラックで早死に

しそうなほどの量を今まで飲んできた。

「ベクトル操作・・・か。自分で言うのもあれだが、改めてチートだと思うわ」

それは彼が持つ異能の力。この世界の科学によって生まれた力なのだ。

ちなみに彼の力は、重力や圧力、それに熱量や風力などあらゆるものの向きを変える事ができる最強とも言える力。

更に彼は”学園都市序列第1位”の称号を数年前に得ている。

能力者の中で一番上である七人しかいない超能力者（レベル5）。

その頂点に立つのが一方通行（アクセラレータ）と呼ばれる存在、それがこの少年。

「つぅか、いつ見ても細いな俺」

ちゃんと筋トレしてンのに・・・とブツブツと呟く。

彼の容姿はそれほど高くはない身長にスラッとした女のような体型。

自身が言う筋トレで少しも肉がついているようには見えない。

「これも能力のせいか？いいンだか悪いンだか、わかったもンじゃねェな」

特に気にしてる訳でもなく、怠そうにため息をつく。

それに何ともなしに携帯を開くと時間は昼前になっていた。

「・・・飯食いにでも行くか」

いつもと同じ何にも変わらない行動を開始する。

掛けてあった木刀を持ち、ガチャっと扉を開けて部屋から廊下へと出て行き、目的地に向かって外出するため歩く。

「あら。これからお決まりの外出？」

ふと、後ろから声がかけられる。振り向くと、白衣に少し短めの黒髪で色気がなさそうな女性。

「まァそンなとこだ。オマエはちゃンと仕事してンだろォな？芳川？」

芳川と呼ばれた女性は相変わらずの一方通行の態度に苦笑する。

「ちゃんとしてるからこそバレないんじゃない。いつも適当にこなしてる貴方が真面目にこの実験をあの子達のために働いているんだから。まったく、こっちの身にもなってほしいわ」

愚痴をこぼしながら尚もクスクスと笑っている彼女に申し訳なさそうにする訳でもなく適当に返す。

「当たり前だろォが。そォしてもらわないと困るからな」

ニヤリと凶悪な顔を浮かべて芳川を見る。

「本当にそこんとこはあの人に似てるわね・・・まっ貴方の担当だったから仕方ないのかしらね」

芳川は彼をここまでに育ててきた人物を思い浮かべて納得していると、うるせェよと返ってきた。

「精々、他の連中にバレないよォに頼むな？」

「えぇ。わかっているわよ」

一方通行は更に念を打って芳川を見る。それにコクりと頷いて逆方向へと歩いていった。

その消えていく彼女を見つめながら面倒くさそうに顔を歪める。

「めんどォな配役だよなァ、俺ァ」

自分の立場を改めて実感して自嘲気味に笑うと歩き始めた。

「どこもクソったれな世界しかないのかねェ」

前世の記憶を持っていて、この世界と比べてどっちも同じだと実感する。

「まっどォでもイイか」

ハッと笑う。

「俺は俺が決めた人生をただ真っ直ぐ進ンでいくだけだ」

「魂が折れねェよォにしっかりとな」

自分はこれでいいと信念を貫くために一歩ずつ前に進む。

時期は7月19日。学生達が待ち望む夏休みが来るそんな時期に彼の物語は始まろうとしていた。

1、与えられた世界（後書き）

次はヒロイン候補？が現れる予定です。

2、原子崩し（前書き）

一応題名通りの人物達が登場します。

2、原子崩し

自室ではぁとため息を漏らす少女がいた。

その原因はわかっていた。だからか、最近仕事がまともにできなくなってしまった。

絶対的な力によって。

そして余りにも真っ直ぐで、曲がらないその存在に心を奪われてしまった。

（どうかしてるわ私・・・）

そんな自分に呆れてしまっていたのだ。

とある路地裏で事件は起きていた。

とてつもない爆発がその場の風景を襲う。

周りには様々醜くなった死体。逃げる人間と、それを追いかける人間。

まさに気が狂うほど狂気に満ちた場所と化していた。

少女は逃げる男を面白くなさそうに見て、能力を放った。原子崩し

（メルトダウナー）。正式には粒機波形高速砲。

七人しかいない超能力者の一人が彼女だ。

固定された電子を男に高速で放つと体が吹き飛び、あっけなく絶命した。

（まったくもってつまらない任務だわ）

ぐちゃりと死体を踏み潰しながら歩く。彼女は暗部に属する裏側の人間であり、こういう事はいつも通りの日常なのだ。

少女は任務終了の電話を入れようと携帯を開く。その矢先だった。

コツっと誰かが近付いてくる足音が聞こえるのが確認できた。

音がする方へと目線を映す。

「うっわァ、こンな道何で来たンだろォな？俺ァ」

周りの死体にも気にせずにだるそうに歩く白い人間。

少女は驚いた。彼女が資料を見た人物と一致していた。

「一方通行……」

「おォ？俺を知ってンのか。俺はあンたを知らねェけど」

名前を知られていても興味なさそうに頭掻いて面倒臭そうに答える。

それに対して相当イライラしたが、我慢する。

「三下には興味ないってか？一応同じ超能力者なんだけど。聞いた事ない？原子崩しって」

同じ超能力者と聞いて頭を捻らせた後、じっくり顔を見てから思い出す。

「そォか……オマエが第四位の麦野沈利……」

「そうよ」

正解と言わん顔で笑う麦野はヒュン、と高速で電子を一方通行へと放つ。

しかし、いとも簡単に避けられた。

「あっぶねェな、オイ。いきなり何すンですかァ？カルシウム足りてンの？」

少し驚いたが、それだけだった。また面倒臭そうな顔をして麦野を見る。

肝心な彼女はあんな華奢な体で身体能力が高いか疑問に思う。

資料には能力が全般に纏められていたが、彼に至っては身体能力も優れている事も書かれていた。

一発避けられただけでは判断できないと思ってまた仕掛けようとするが、いつの間にか殺した奴らの仲間が一斉に現れて二人を囲んだ。

麦野はよほど一方通行にしか集中していなかったのだろう。油断した、と愚痴をこぼした。

「ねぇ。あんたが来なきゃ直ぐに帰れたんだから、これ、何とかしてよ？」

麦野の無責任な態度に一方通行は

「なンで俺が後始末しなきゃいけないンだよ」

正論を述べた。

だが、相手は待ってくれない。敵は一斉に襲い掛かってくる。

「頑張ってにゃーん」

いつのまにかすり抜けていたのか輪の外にいた。

（ふざけンなァあああああ！！あのクソアマ、まじで丸投げしやがった！）

麦野に怒りを感じながらも、持っていた木刀で立ち向かう。

「クソったれ共ォォォおおおお！！恨むンなら、第四位になァ！！！」

能力を使わずに木刀と身体能力だけで突っ込む。

麦野は外は漸く一方通行の実力に納得した。

そして余りにも魅力的だと思った。

敵陣に一人で立ち向かうその白髪の姿は、まさしく夜叉そのもの。
何十ものいた連中はあっというまに地に伏せた。
「ったく、余計な重労働させやがって」
木刀を降ろして外れの方で見ていた麦野を睨む。
「思ってたよりすごいわねぇ。あんた、私んとこで働かない？」
麦野は笑いながら流して、勧誘を始めた。
それには尚更歪める一方通行。
「暗部組織にいるンだったか？……俺は誰の駒になる気はないね」
勧誘をあっさりと否定した。
「俺は俺が決めた道しか進まねェ事にしたンでな」
その言葉に麦野は苛立つ。
「私より上のやつが、自由にできると思ってんのか？」
そんな事は絶対無理だと断言する。そういう風にできてしまっていると麦野は実感していた。
「そンなン、テメェが決める事じゃねェだろ」
一方通行も麦野を見てそれを気づいている。
「もし暗部に堕ちたとしてもよ、自分（テメェ）の意志さえしっかりしてりゃ

あ、どォにかなンだよ」
表情は無表情で麦野に背を向ける。
「暗部だからって別にテメエのやりたいよォにやりゃあイイじゃねェか。殺したいなら殺せ、殺したくないなら殺すな。それを決めンのは他の誰でもねェ」
「自分で決める事だ」
それを聞いて少し顔を下に向ける。
「殺したくないとか、そんな勝手なことできるわけないじゃない……」
絶対に無理であって、それを暗部としての意味がないと、勝手に思い込んでしまっている。
「それさえありゃ十分じゃねェか。俺もこンなとこ見ちまったし、何かあったら助けてやるよ」
それを聞いた麦野は一方通行のいる場所を見たが、そこにはもういなかった。
「どうやって助けに来るのよ……」
残された麦野はただ呟くしかなかった。
そして現在に至る。
あれから殺す事が余りできなかった。殺す事に恐れるようになった

のかまだ麦野はわかっていない。

「自分の意志ってやつなのか？」

ベッドに横になりながら考えながら目を閉じる。

「一方通行……か」

あの時に現れた白髪を思い出してそっと呟いた。

2、原子崩し（後書き）

超電磁砲は次に出ます。

3、幻想殺し、超電磁砲そして……（前書き）

やっと出てきます。麦のんは個人的に好きなので、最初に出しました。

3、幻想殺し、超電磁砲そして……

7月19日。いつものように適当にぶらついて結構な時間が経った。

夏だからか、6時にしてはまだ少し明るい。

学生達も様々な行動をとったりと、人が溢れかえっていた。

その中に一方通行はいた。

「相変わらずに、わらわらいますねェ」

そんな様子を横目で見ながら歩く。

「そろそろ飯食って帰るか」

そしていつものようにファミレスを見つけてそこに入る。

元気の良い店員の声とともに中に行くと、見覚えのある制服を来た茶髪が座っていた。

そこでピタッと止まった。

（……何でこンなとこにいるンだよ…）

一方通行は誰なのか確信して近付く。

そこにいる人物が想定外とは気付かずに。

「オイ」

茶髪の少女に近付いて声をかける。
その振り向いた少女を見て何か違和感を感じていた。

（……あれ？そォいや、ゴーグルしてねェな。アイツらにとっては必要だろ）

その少女はゴーグルではなく、可愛らしい髪止めをつけていた。

「……何よ。あんた誰？」

表情を険しく、警戒しながら睨む彼女に一方通行は間違いに気づいた。

（……オリジナルかよ……）

一方通行が思っていた彼女達ではなかった事に溜息をついた。

「……いや、わりィな。俺の勘違いだった」

想定外の事だったのですぐに離れて別の席に座ろうとしたのだが。

「ねぇ、君かわいいね」

自分が離れた瞬間、五人のチンピラが少女に話し掛けていた。

「あっパフェとコーヒー。ブラックで」

そんな様子を横目に見ながら注文する一方通行。

チンピラ達が幾度も話しかけても無視を決めている少女。
「お待たせしました」
店員が頼んだものを持って来たのを平然と食べている。
そんな態度に切れたのか、少女の腕を掴んだ。
その瞬間ビリっと電撃が走り
「ぎゃあああ！！！」
悲鳴を上げてこちらのほうへと倒れてきた。運悪く
「きゃっ！！」
一方通行が頼んだものを持って来た店員とぶつかる。
ガシャン
案の定、パフェとコーヒーが床にこぼれた。
「能力持ってっからって調子こくんじゃねぇ！！！」
それを見ていた仲間が少女に殴りかかろうとすると
ガシィとその手を捕まれてそのまま反対方向へと投げ飛ばされた。
チンピラと少女も驚いた。
「ったく、ぎゃあぎゃあってハシャいでンじゃねェよ。発情期なンですかコノヤロォ」

間に入ったのは何故かキレている一方通行がいた。

「見ろコレ。お前らがソイツに絡ンだせいで……俺のパフェとコーヒーが台なしじゃねェかァあああああっ！！」

「ぶっ！？」

バキッと殴られた音とともにまた一人倒れる。

「何だお前！？ぶっ殺してやる！！」

リーダーらしき奴が襲い掛かると同時に残った仲間も攻める。

「うっせェええ！！俺ァな、唯一楽しみなもン、邪魔されて苛ついてンだよ！あァ、畜生。自分で言ってて悲しくなってくるぜクソッタレ！！！」

ブオン！！！

木刀を横に振って当たった瞬間、チンピラ達は一斉に吹き飛んだ。

完全に最後は一方通行の八つ当たりである。

「あァスッキリしたぜェ」

ポン、と肩に木刀を軽く乗せて満足そうにする。

もちろん周りは騒然としているが、少女は何か考え込む顔で一方通行を見る。

（白髪……赤い目……木刀……なんかどっかで聞いたような？）

う～ん？と首を傾げているとこちらに気づいた。

「何だ？どォした超電磁砲（レールガン）」

「！あんた私を知ってたのね！」

（あっやべェ……）

超電磁砲と呼ばれた少女は一方通行を見て驚いている。

それに対して顔を有り得ないほど引き攣らせた。

その後とった行動は……

何も言わずに能力を使って一瞬で逃げた。

「なっ！」

余りにも見えなかったために反応できなかった。

そして誰かが通報したのか、警備員（アンチスキル）がやってくる。そして右手にある感触に不思議に思い、見ると

ダラダラと体中から汗が大量に溢れた。

右手にあるのは彼が先ほど使っていた凶器。木刀だった。

「あんの野郎！！！！！！」

思わず大声だしてこの場から即効で逃げた。

「ふゥ……思わず言ってしまったぜ」

とにかくあの場から離れたかったためそんなに遠くには行ってなかった一方通行は先程の失言に苦笑した。

「これから一仕事あるってェのに疲れたな……キャンセルしちゃダメか？」

今更ダメだろォなと思い、溜息が出てきた。

「……もォコンビニ行くしかねェか」

考えれば考えるほど体力が消費していくの感じて歩く。

「あれ？一方通行じゃん」

すると少しばかり懐かしい声が聞こえてきた。

ツンツン頭に学校の夏服を来た少年。

「おっ久しぶりだな。上条」
上条当麻。一方通行の高校の親友の一人。
「入学式以来だよな」
「まァな」
一方通行が何故、学校に入ったのか。それは芳川ともう一人、親代わりとも言える人物が手配してくれたのだ。
レベル5だろうと、普通の生活を堪能して欲しいとそう願って平凡な高校に入学させた。
現に実験と重なり、そんな学園ライフはまだ送ってない。
ただ唯一できた初日からの友達、それが上条だった。
能力の壁をいとも簡単に突き破って一方通行に話しかけた事がきっかけ。
「小萌先生も待ってるぜ。アクセラちゃんはまだですかねーって」
「あンのガキ教師……変な呼び方すンなよ」
しかめながら教室にいた子供じみた教師を思い出す。
「ハハハ！でも、実際いつから来れるんだ？」
上条は気になってたことを振り出す。

「まァもう少しで終わるかもな」

一方通行がそう言うと上条は嬉しそうにする。

「おっ！て事は二学期は来れるのか」

楽しみだなと浮かれている。

「もォこォなンだったら、二学期から編入した方がよかった気もしたがな」

一方通行もケラケラと笑う。

「そういや、交換してなかったな」

上条が思い出したように携帯を取り出す。それに勘づいたのか同じように取り出した。

赤外線を利用して数秒で終わると

「そうだ。休み中に終わったら遊ぼうぜ！二人紹介してぇし」

ぽんと一方通行の肩を右手で軽く叩く。

幻想殺し（イマジンブレイカー）

レベルでは０と判定されているため、この少年は無能力者。

右手に宿った異能の力を打ち消す能力は生れつきだと言う。

自然に一方通行に触れれる存在。

一方通行もそれをなんとなくだが理解している。

「あァ。そンときは連絡する」

だから何の気にも止めなく答える。

「じゃあ、またな」

上条がそう言ってすれ違おうとした時だ。

「見つけたわよ！！白髪ぃいいいい……って何であんたもいるのよっ！」

「「げっ！？」」

恐ろしい形相で近づく木刀を持った少女に二人とも嫌そうな顔をした。

少女は上条もいる事に少し戸惑った。

「上条、あいつと知り合いだったのか」

「……まぁ、会ってはビリビリされてるわけですよ…」

ツンツン頭がげんなりしている。

「けど、今回は俺は急がないといけないんで！！あとは任せた一方通行ぁ！！」

そう行って猛ダッシュで逃げる上条。

「待って！！逃げないで上条くぅうううん！！？１０円、いや１００円あげるから戻って来てェえええええ！！！！！」

何ともケチくさい第一位。だがもう上条の姿はなかった。

ギギッとぎこちない動きで少女がいるだろう場所を見ると、正面で思いっ切り目を見開いて驚いていた。

「あんたがあの……一方通行？第一位の？」

「はィ……何を隠そう私があの一方通行でございますゥ……」

もうどうでもよくなった一方通行は考えるのをやめた。

その頃ある隠れにしては疑わしい普通の家の外ではゴーグルをかけている少女は誰かを待っていた。

「むぅ研究所にもここにもいませんでしたか。とガックリと探し人がいない事にミサカはうなだれます」

待っていると言うよりも、どうしたもんかとウロウロしている不審者になっている。

「これ以上、迂闊には行動できないので諦めますかと研究所に戻る……ん？」

トボトボと来た道を引き返そうとしたが白い何かが横たわるのが見えた。

白いの見た途端、もしやあの人では！？と急いだ。

しかし、それは白い修道服を着たシスターだった。

誰か近付いてきたのを感じとったのか顔だけ上げる。

見事な銀髪に綺麗な翠色の瞳に幼い顔をしている。

そしてその彼女はこう言った。

「おなか……すいた」

3、幻想殺し、超電磁砲そして……（後書き）

原作とは遥かに違いますね。

4、禁書目録（前書き）

明けましておめでとうございます？？今年もよろしくお願いします？？

新年早々の最初の更新です。

4、禁書目録

（何か気まずいンですけど……どォしたらイイか何てわかンね）

変わって場所は既に近くの公園のベンチに座っていた。

一方通行はどうすべきか考えていると

「ハイ」

コトンと何かが置かれたのを見ると、ブラックの缶コーヒーだった。

「まさかあン時でわかったのか？」

絡まれながら聞いてたのに驚いた。彼女は気恥ずかしそうに頷いた。

「サンキュー」

フッと笑うとドサッと隣かに座る彼女。

こうして見るとあまり第三位には見えない。

最強の電撃使い（エレクトロマスター）。

0から5までのし上がった少女。最初っから5だった自分とは違う。

「なァ超電磁砲」

「御坂美琴って名前があるんだけど」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4186z/

とある侍の最強物語

2012年1月1日01時49分発行